

Title	自然保護と環境保全 : 「保続的(持続的)発展」を支える思想
Author(s)	村上, 公久
Citation	聖学院大学論叢, 23(2) : 31-40
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2780
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

自然保護と環境保全
——「保続的（持続的）発展」を支える思想——

村上 公久

Preservation and Conservation Practice
Two contrastive ideas in maintaining our environment

Kimihisa MURAKAMI

There have been two opposite standpoints in dealing with nature and natural resources: preservation or protection, and destruction or abuse. Some advocate that nature should be protected, while others argue that people can never survive without consuming natural resources. To defuse the confrontation, the concept of “conservation” was proposed by Gifford Pinchot, mainly in terms of maintaining and managing forest resources. However, friction between proponents of “conservation” and those of protection, such as the conflicts between Gifford Pinchot’s “conservationism” and John Muir’s “preservationism”, developed. UNCED 1992, The United Nations Conference on Environment and Development, was the latest global conference on the environment, and meetings devoted to climate change, etc. followed. To harmoniously combine “environment and development”, the theme of “sustainable development” was conceived as a theme necessary to all the world for the survival of both mankind and the environment. This paper attempts to clarify the core problems concerning this issue by reviewing the two contrastive ideas of sustaining the environment while at the same time developing it in the problem of maintaining our environment.

Key words; preservation, conservation, sustainable development, John Muir, Gifford Pinchot
Key words; 保護と保全, 自然保護, 環境保全, 保続的（持続的）発展

0. はじめに「環境か開発か」——自然保護と環境保全——

現在、国際機構、各国、自治体、地域の環境問題における最大の政策課題は、「環境か、経済成長か」のディレンマをめぐる合意形成とその妥当性の検討である。地球環境を巡る諸問題を初めて国際的な枠組みで討議した1972年6月開催のストックホルム「国連地球環境会議」以来、20年を隔てて1992年6月に開催されたりオデジャネイロ「環境と開発に関する国連会議」UNCED, The United Nations Conference on Environment and Development（通称「地球サミット」Earth Summit）が、地球環境問題に関して「環境と開発の調和」を中心のテーマに掲げたことに明瞭に表れているように、「環境か、開発か」、「自然を護るのか、自然を利用するのか」という対立する二つの立場の調和を実現する方途を探ることは、環境問題に関する諸問題の中で最大の課題である。一方日常の暮らしの中でも、「環境を護るのか、物質的豊かさを求めるのか」の対立する二つの立場の調和は重要な課題である。地球環境についての国際会議「地球サミット」ではその会議の成果として保続的発展（持続的発展）Sustainable Developmentの実現を明確な目標として示して掲げ環境問題の世界共通の課題を明瞭化した。「保護主義」preservationismと「保全主義」conservationismとして表現されるこれらの対立する二つの立場は思想的には「環境主義」environmentalismに収斂しつつあるが、自然を利用し消費し続ける枯渇的な開発ではなく保続的な（持続的な）開発・発展の実現によって、地球温暖化を初めとする地球環境の危機回避の可能性を探る方策は、多様に提唱され試みられている。

本試論ではこの重大で根本的な問題について、「保護」preservationと「保全」conservationの異なる二つの概念を明瞭にして比較考察することにより保続的開発（持続的発展）Sustainable Developmentの実現に資する方途についての手掛かりを得ることを目途とする。このため以下に、「保護」preservationと「保全」conservationの一般的な解説、アメリカ環境史の中での同二つの立場の発生と展開、アメリカの森林開発史における同二つの立場の対照、を順次に検討・考察する。その中で特に、以下の3-2. 保護主義者John Muirと保全主義者Gifford Pinchotとの論争において、「保護」preservationと「保全」conservationの異なる二つの概念を巡ってそれぞれを立脚点としたアメリカの二人の環境思想家の人間と自然との関わりを巡っての立場の違いを省察し、現在の自然・環境を巡る自然観・環境観に至る経緯を考察する。

1. 自然と環境——自然が環境に変わる——

ヒトの出現以前の自然つまりヒトが未だその足を踏み入れている手つかずの自然を「原自然」

proto-nature と呼ぶことにする（北米で頻用される wilderness ウィルダネスという語に対応する）。最後の氷河期が終わり地質時代の第四紀に入って地表がほぼ現在の状態になったが、ヒトの活動が盛んになり原自然の地を踏むときそこは「自然」nature に変わる。その活動が及び始めるが未だ人為が強く影響を与えていない部分を「準自然」sub-nature と呼ぶ。やがてヒトが自然の脅威に抗して生活圏を拡張し、さらには道具を使うなどしてヒトが強く自然に関わり始めると、ヒトにとってその自然は「環境」environment へと変質する。つまり、ヒトの登場によって原自然が自然になり、文明を持ったヒトの動物以上の生活が始まるとヒトにとって自然が環境となる。この自然が環境となるプロセスにおける画期は「新石器の使用の開始」である。人類が新石器を使い始めたとき本格的に文明が始まり、そして大規模な自然破壊が始まった。地表に文明を運びたヒトすなわち人間が暮らしている限り自然は環境へと変わってゆく。産業革命以降は、強く科学技術の人為を受けた環境の一部分はさらに順次「人工環境」artificial environment へと変質してゆく。

語「環境」は基本的な語義としては、先ず「めぐり囲む区域」そして「四囲の外界・周囲の事物」さらに詳述して「特に人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界」などと説明される。しかしこれは欧米における用語例えば英語での用語 environment の和訳としての「環境」についての語義である。「環境」の原義は字義として「市域をめぐり囲む 市外域との境界」「市域を囲む防御の城壁が造営される境界線」であって、本来は environment を意味するものではない。environment を「環境」と和訳したのは外敵から都市を護る防御の城壁が無い我が国の日本的語感での和訳であろう*。語「環境」は原義からは離れてわが国で独自に使われている用語である。興味深いことに現在は和製の用語「環境」が、我が国から発して漢字圏に environment を意味する語として流布している。

「環境」は、具体的には生活の場である。従って環境は“誰々にとっての環境”として決まる。誰々にとっての環境なのであって、主体が先ず決まらなければ、その「環境」は無い。「環境」は「主体」を廻るもので、主体と関わりを持つものである。この「主体」が他の生物ではなく人間である場合は、「環境」は人間にとっての環境となる。今は「環境の時代」であるが、環境を考えることの起源は、「土地評価」である。人間にとってのその土地の評価、例えば麦は育つが稲は育たない、居住に適さない、乾燥しすぎる、……など人間あっての、人間にとってそこは良いか悪いかの判断あっての、「環境」という概念なのである。これは極めて人間の自己中心的な概念である。「人間中心」から始まる環境の意識はその概念の始原から、人間中心ゆえの問題を内包している。

*（例えば、奈良時代の京であった平城京は唐帝国の京であった長安を模して造営されたとされるが、長安の市域を廻り囲んでいた防御城壁は奈良の都には無い。我が国において現存する唯一の京を護る防御城壁まがいのものは、現京都市域に僅かに残存している御土居である。JR 新幹線京都駅は、この御土居跡の上に建築されている。）

生活している主体とその生活の場との関係は、相互的である。一方から他方へと作用アクション action が及ぶとき、逆の向きにリアクション reaction が及ぶ。アクションとリアクションは双方向に相互的にかつ同時に作用を交わす。主体は生活している場の個々の事物に働きかけて、それらを変形し、変質させ、改造する。同時に生活の場を構成しているさまざまな物は、そこで生活している主体に働きかけて、その生活の内容を与えるとともに、それを制約して拘束する。この相互作用の過程は継続してとどまることが無い。改変を受けた環境は、新しい仕方において主体に働き返す。環境から影響を受けた主体は、さらにまた新しい仕方において環境に働き返す。このようにして主体（ヒト）と環境の相互関係（呼応関係）によって形成されるシステムとしての〔人間—環境〕系が動き続けている。

「原自然」の中に登場したヒトはその文明の力が源となるさまざまな人為 art によって「自然」を「環境」へと変えてゆき環境問題を起こしている。現在「地球環境問題」を巡って最大のディレンマは「開発か環境か」の対立である。当初はヒトが命を保つためにやがては人間が豊さを享受するために自然を「破壊・掠奪」destruction, abuse する立場と、あるがままの自然を護ろうとする「保護」preservation, protection の立場の激しい対立・対決である。人間の「環境管理」の責任はこのふたつの立場の対立に関わるものではなくて、実は本試論で後述するように例えばギフォード・ピンショール Gifford Pinchot によって提唱された、第三の立場「保全」conservation なのである。ヒトにはそして文明を帯びた人間には（主張する自身を含め）生きるために自然を破壊・消費する必要が全く無いかのように「保護」を唱えても解決にはならない。人間の「環境管理」の責任は、破壊と保護、これらのいずれでもなくて生命圏の生態系を育みつつその余剰の生産物をヒトが消費する「保全」の実行にある。自然の中の人間が現在抱く問題は、「自然の支配」か「自然との共存」かの二者択一の問題であるが、「保全」conservation はこれらの二つの対立を止揚しようとする。

2. アメリカ環境略史

本試論で議論する「保護」と「保全」の概念を理解するためには、アメリカの環境史を振り返っておく必要があるが、「保護」と「保全」の理念と実践の試みの変遷を大まかに二つの時期に分けて整理し略述すると以下のようなになる。

2-1. 初期の運動（1830～1910）

アメリカにおいて環境思想の先駆となったのは19世紀の前半に「探険と開発ではなく、人間と自然との調和の大切さ」を説いたエマーソン Ralph Waldo Emerson とソロー Henry David Thoreau（「ウォーキング」"Walking" 1851；「ウォーデン森での暮らし」"Walden, or Life in the woods" 1854）

の二人である。マーシュ George Perkins Marsh (「人間と自然」“Man and Nature” 1864 Vermont 州選出の下院議員) は「自然環境、資源は無限ではなく、人間はその管理に責任がある」ことを主張した。この Marsh の主張は、1935 年シアーズ Paul B. Sears に、1948 年オズボーン Fairfield Osborn に引き継がれ現在の環境危機を警告する早期の運動となった。また本試論で扱うピンショー Gifford Pinchot に強い影響を与え、「保全」conservation の概念を導き出すきっかけを与えた。

新しい国アメリカは、旧宗主国を含むヨーロッパに対抗できるものを探し求めていたが 1832 年に画家ジョージ・カトリン George Catlin は、国民の公園 (Nation's Park) の設立を提唱し、1872 年、U. グラント Ulysses S. Grant 大統領により世界最初の国立公園 イエローストーン国立公園 Yellowstone National Park が設立された。連邦政府が「フロンティアの消滅」を宣言した年の翌 1891 年、連邦政府議会は「森林保護法」を制定し「連邦政府森林」を指定した。これがアメリカ合衆国国有林 National Forest 制度の起源である。1905 年、議会はフォレスト・サーヴィス U. S. Forest Service (農務省 森林庁) を創設しアメリカの森林行政における制度と機構が確立した。以降、森林の取り扱いをめぐる 2 つの施業法、「保続的森林管理 (恒続林経営)」sustained yield と「森林の多目的利用」multiple use が提唱され、現在に至る再生可能資源としての森林資源の管理理念となっている。

2-2. 保護か保全か (1911 ~ 1932)

20 世紀に入り保護 Preservation と保全 Scientific Conservation の異なる二つの立場が表れて対立する。保護主義者 Preservationist の代表的な思想家はジョン・ミューア John Muir (1890 Sierra Club を創設)、アルドール・レオポルド Aldo Leopold であり、保全主義者 Conservationist の代表的な思想家・政治家はギフォード・ピンショー Gifford Pinchot, T. ルーズベルト Theodore Roosevelt, ジョン・パウエル John Powell, チャールズ・ヴァン・ヘイズ Charles Van Hise らであった。1912 年、議会は国立公園制度 U. S. National Park System を創設し連邦政府の行政としての国立公園の管理・運営が開始された。1916 年国立公園局 U. S. National Park Service が内務省内 U. S. Department of the Interior に設置された。1935 年ロバート・マーシャル Robert Marshall は、ウィルダerness ソサエティ Wilderness Society を設立した。これはいわゆる環境 NGO の早期の団体・組織であり、現在も影響力のある活動を続けていて環境団体・組織の代表的役割を果たし続けている。

3. 自然保護と環境保全

3-1. 二つの思想 自然保護と環境保全

「保護」preservation と「保全」conservation の異なる二つの思想についての決定的な差違は「人

間がどの程度にまで生態系に関与するか」という点にある。前者は「手付かずの自然を尊重し人間の影響から護る」という立場であり、後者は「公の益のために自然が破壊されることを防ぎつつ利用するために管理する」という立場である。

保護 preservation という思想は、ミューア John Muir に代表される自然保護主義者が唱道するものである。後には「大地の倫理」The Land Ethic を提唱したレオポルド Aldo Leopold も保護を重視する立場を取っている。

20代の前半に生まれ故郷のスコットランドを出て新大陸へ移ったミューアは徒歩によるのみで一日に短くて30キロメートル、最長60キロメートルという驚異的な移動距離をもって北米を旅した。19世紀中葉の北米を徒歩で旅する中で彼は各地で森林破壊を目撃したが、その森林伐採の規模と速度が継続した場合に北米の森林は程無く壊滅するであろうとの危惧を抱くようになった。1832年に自然保護 NGO の嚆矢とも言うべきシエラ・クラブ Sierra Club を創立し、啓蒙活動を展開した。やがてミューアの思想と活動は大統領 T. ルーズベルト Theodore Roosevelt の共感を得るところとなり、ヨセミテ レニヤー山 グランドキャニオンなど5つの国立公園を指定創立するに至った。ミューアは同大統領を助けて約1.5億エーカーに及ぶ国有林 National Forest を設定した。

ピンショーが書き残している記述や資料に比してミューアには論理的な記述は乏しい。ミューアにはロマンティックで詩的な記述が多いために、現実の資源管理さらには行政上の制度化を伴う天然資源の管理についての科学的な説明を伴う論拠を得ることは困難である。

一方、保全 conservation という思想は、ピンショー Gifford Pinchot によって初めて提示されたものである。ピンショーの資源管理の思想もまた大統領として連邦政府の行政の責任を負っていた T. ルーズベルト Theodore Roosevelt に受け入れられることとなり、またジョン・パウエル John Powell, チャールズ・ヴァン・ヘイズ Charles Van Hise らによって支持され主張され普及されることとなった。

ここでピンショーが提唱した「保全」conservation という思想を理解するために「林業」について考えてみる。

「林業」forestry は土地利用産業の一つの形態であるが、同じ土地利用産業である「農業」を観た場合に、農業を営む行為である農耕は土地の生産性の維持に留意しつつ土地に作物を育てて収穫を得る。収穫の後には、土地を拵えた上で再び収穫を得るために作付けを行い作物の育成を図る。農業の場合はこのサイクルが短くて大半は一年以内で収穫を得る。このサイクルを数十年の長いサイクルに取って、農耕作物ではなく林木の植樹・植林（作付け）と伐採（収穫）を繰り返す土地利用が林業である。

つまり林業は、農業における「畑」を「林地」に置き換え、「農作物」を「林木」に置き換えて「収

穫」を得るために「伐採」するまでの（営農ではない）営林の期間を長く取った土地利用産業なのである。森林には、破壊してはならない保護の対象である護るべき森林「天然林」や「保護林」がある。しかし一方「作物」である林木を育てて収穫する林業の対象である植林と伐採を繰り返す「人工林」がある。ここで肝要な点は、林地がその土地生産性を著しく劣化させるまでに収奪する破壊的な森林の利用を制御し、保続する林業を継続することである。

森林管理を職業とした最初のアメリカ人であったピンショールが実際の業務の中で森林管理の体験を通じて得た「公の益のために自然が破壊されることを防ぎつつ利用するために管理する」ことを実現する思想が「保全」conservationであった。

ピンショールが得た「保全」conservation という概念は、マッギー W. J. McGee によって思想的な補完を受け確立された資源管理の理念となった。ピンショールは彼の親しい友人でもあった T. ルーズベルト大統領に「保全」を提案し実政策として展開していった。ピンショールは「保全」という現在世界中で広く支持され用いられている理念を確立しその実践を彼の実務の中で果たした。死去する殆ど直前 1946 年に回顧して記述した著書 *Breaking New Ground*（出版は翌 1947 年）によれば、conservation という術語の由来は次のようである。彼がワシントン D. C. で連邦政府の官僚として執務していたとき当時は英領であったインドで森林行政において単なる営利を求める林業経営の対象としての森林ではない「保全の対象としての森林」を conservancies と称しその管理者を conservator と呼んでいたことにヒントを得て、辞書には無かった conservation という語を創った。これが今では環境問題に関わる者であれば誰もがよく知っている同術語の由来である。

3-2. 保護主義者 John Muir と保全主義者 Gifford Pinchot との論争

アメリカ国立公園の父と称えられているジョン・ミューア John Muir (1838-1914) とアメリカ国有林の父として高い評価が与えられているギフォード・ピンショール Gifford Pinchot (1865-1946) の二人は 19 世紀の後半にそれぞれの異なる立場で、アメリカ合衆国の自然と資源の管理について重要な理念を提供し、今日にあっても内外の環境問題をめぐる政策に大きな影響を与え貢献している。これまでのこの二人についての一般的なあるいは大衆的な評価は、ミューアは自由人であり自然を愛し護るロマンティックな環境思想家であって新約聖書の全部をまた旧約聖書のおよそ四分の三を暗誦している敬虔な宗教家で、一方ピンショールは名門の出身で森林管理の専門家としてアメリカ合衆国農務省に山林庁を創設し自ら初代長官に就任した生涯に二度ペンシルヴァニア州知事を務めたなどの官僚のさらに共和党政政治家の経歴が与える冷たいエリートの印象があって、ミューアが主役であって、合理的な自然の利用を是とするピンショールが敵役でありミューアの引き立て役のように見なされてしまう傾向がある。しかし前述の UNCED が契機となって以来盛んに唱道されている「保続的開発（持続的発展）」Sustainable Development の基礎ともいべき理念を明確に打ち出

したのはピンショ어의大きな功績であることを理解すれば、自然保護一辺倒の現代社会の潮流の中でのミューアへの無思慮な傾倒は環境問題の解決に際しては道を誤ることに繋がりがかねない。それはミューアへの正当な評価を狭量な自然愛好のセンチメンタリズムの下で歪曲されたものへと変質させる。

ミューアは前章「2. アメリカ環境略史」で触れたエマーソン Ralph Waldo Emerson とソロー Henry David Thoreau から強い影響を受けた。ミューアは都会の喧騒を離れ山地を歩き森の中で時を過ごすことは「家に帰る」ことだと考えていた。

一方ピンショーには多くの肩書があるが彼の自然環境問題に関する際立って重要な属性は、彼が森林管理を職業とした最初のアメリカ人であったことである。ピンショーは前章のマーシュ George Perkins Marsh から「自然環境、資源は無限ではなく、人間はその管理に責任がある」ことを学んでいた。

1896年ミューアはピンショーと知り合うこととなり、共にかけがえのない自然そして貴重で有限な天然資源をめぐる観方を共有していたが、初めて両者の対立が際立ったのは、林内放牧の是非を巡っての対立である。1897年の夏の終わりにピンショーは保護林での羊の林内放牧を是認する旨の意見をシアトルの新聞で発表した。以降両者は当時発行部数の大きかった *Outlook*, *Harper's Weekly*, *Atlantic Monthly*, *World's Work*, *Century* などの各紙・誌上で論争した。そして、両者が決定的に対立することとなったのは、ヨセミテ国立公園内のヘッチ・ヘッチイ溪谷 Hetch Hetchy にサンフランシスコへの水の供給源としてダムを建設する計画が提案された際であった。ミューアはヘッチ・ヘッチイ溪谷を神の創造による神聖な「神殿」と見做していた。そこにダムを建設することは山や谷を親しみと畏敬の念をもって仰ぐことが無い「全能のドル紙幣」を礼拝することだと非難した。これに対してピンショーは公の益のために、よく計画管理された自然を部分改変する人為は是認されるとしてミューアに対立した。

4. まとめ

この試論の背後には、「自然保護によって本当に自然は護られるのか。」という現代世界が直面している大きな深いテーマがある。「自然を愛し、大切にしよう。」という訴えに反対する者はいないであろう。しかし我々人間は食物連鎖の最終端におり、酸素を吸って二酸化炭素ガスを吐き出し、科学技術を駆使して高度の文明を維持発展させ続けており、自然を破壊し資源を消費しなければ生き続けてゆくことは出来ない。

2010年の秋は酷暑の後であったこともあって、山地での野生動物の餌となる木の実などの実りが例年に比して少なく、熊や野猿などの野生動物が人里に出没して農作物の被害や人間への加害が急

増した。このような事態が深刻化すると「自然保護」が非現実的な美辞麗句に聞こえ始める。

本試論で扱った「環境保全」の思想は、本来は“自然を護れ”と訴える「自然保護」と“自然を壊さなければ生きて行けない”としてある程度の「自然破壊」を容認する二つの立場の不毛な対立を脱して自然と人為との調和を図るため、両者を止揚する人間と自然との関わりについて望ましいあり方を探る試みの中で生じてきたものである。

本試論で「保全」conservation の提唱者としてピンショール Gifford Pinchot の資源管理の思想に注目したが、ピンショールはイェール大学での学びを終えた後に当時のアメリカ合衆国には森林学の教育機関が未だなかったためフランスのナンシーにある森林学院に留学しヨーロッパでドイツを中心に展開され始めていた保続的な森林管理の科学 sustainable forest management を学んだ。我が国の森林学においては明治期に「恒続林思想」として紹介されたが、筆者自身も学部の講義でこの資源管理を学んだ。「ドイツ恒続林思想」と称されて受容されているこの森林資源管理科学は、プロシアの森林官で森林学の権威であったアルフレート・メーラー Möller, Alfred (1860-1922) が Der Dauerwaldgedanke として体系化したもので「最も健全で最も美しい森林は最良質の木材を最多量に供給する」という彼の言葉とともに知られている。

筆者は、過去 20 年に亘って学部においては「環境保全論」Environmental Conservation というコース名を付した専門科目を講義してきた。科目名に「保全論」Conservation の語を付していることについては開講の冒頭で短く述べては来た。これまで「保全論」を標榜していることについて説明する特別の機会は無かったが、今次この試論において少しはその責を果たすことが出来たように思う。「保全論」実践の方途また環境政策については別の機会を得て、かつて行政官としてまた現在は教育にも携わる者として我が国のまた主として ODA 国際協力事業の公務において海外の環境行政を担当した経験および自治体の環境行政の指導に携わってきた体験を基にして、具体的な事例を含めた考察を試みようと思う。

参考文献

- 村上公久「自然保護を超えて」、環境問題特集「自然を壊しながらしか生きられないのか」『百万人の福音』6月号 No. 570 いのちのことば社 1998年 pp. 28-31
- 村上公久「国立公園の起源——国立公園の創設を導いた画家 G. Catlin」聖学院大学論叢 vol. 23 No. 1, 2010年
- 村上公久「環境思想」、『情報教育事典』（3. 社会・生涯学習・環境・哲学・思想 中課題「環境思想」）丸善 2008年 pp. 109-110
- 「環境」、『人間科学の事典』編集 思想の科学研究会 編集代表 青山秀夫・阿部行蔵・岡本太郎・南博 河出書房 1951年 pp. 5-40
- Benson, W. Todd *President Theodore Roosevelt's Conservations Legacy* 2003
- Berry, Wendell *The Gift of Good Land* North Point Press, 1983
- Blewitt, J. *Understanding Sustainable Development* London: Earthscan 2008

- Brinkley, Douglas G. *The Wilderness Warrior: Theodore Roosevelt and the Crusade for America* 2009
- Daly, H. & J. Cobb *For the Common Good: Redirecting the Economy Toward Community, the Environment and a Sustainable Future* Boston: Beacon Press 1989
- Grove, R. H. "Origins of Western Environmentalism," *Scientific American* 267 (1): 1992 pp. 22-27.
- Jones, Eric L. "The History of Natural Resource Exploitation in the Western World," *Research in Economic History*, 1991 Supplement 6, pp. 235-252
- Möller, Alfred *Der dauerwaldgedanke, sein sinn und seine bedeutung*, Berlin, J. Springer, 1922
- Muir, John *Studies in the Sierra* (1950 reprint of serials from 1874) The Sierra Club 1950
- Muir, John *Picturesque California* (1888-1890) San Francisco, New York: The J. Dewing company, 1890
- Muir, John *The Mountains of California* New York: The Century co. 1894
- Muir, John *Our National Parks* Boston and New York: Houghton Mifflin company, 1909
- Muir, John *Stickeen: An Adventure with a Dog and a Glacier* Boston: Houghton Mifflin, 1915
- Muir, John *Stickeen: The Story of a Dog* Boston: Houghton Mifflin Co., 1909
- Muir, John *My First Summer in the Sierra* Boston, New York: Houghton Mifflin company, 1911
- Muir, John *Edward Henry Harriman* Garden City, N. Y.: Doubleday, Page & company, 1911
- Muir, John *The Yosemite* New York: The Century Company, 1912
- Muir, John *The Story of My Boyhood and Youth* Boston: Houghton Mifflin Company, 1913
- Muir, John *Letters to a Friend* Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1915
- Muir, John *Travels in Alaska* Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1915
- Muir, John *A Thousand-Mile Walk to the Gulf* Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1916
- Muir, John *The Cruise of the Corwin* Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917
- Muir, John *Steep Trails* Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1918
- Nash, Roderic *American Environmentalism: Readings in Conservation History* 1990
- Pinchot, Gifford *Breaking New Ground*. New York: Harcourt Brace, 1947
- Pinchot, Gifford *A Primer of Forestry*. (Vol. 1: *The Forest*, Vol. 2: *Practical Forestry*). Washington: Government Printing Office, 1899-1905
- Pinchot, Gifford *Forest Conservation in the Adirondacks*. N. p.: n. p., 1911
- Pinchot, Gifford *The Training of a Forester*. New York: J. B. Lippincott, 1914
- Pinchot, Gifford *Talks on Forestry*. Harrisburg: Pennsylvania Dept. of Forests and Waters, 1925
- Sivaramakrishnan K., "Forests and the environmental history of modern India," *Journal of Peasant Studies*, Vol. 36 Issue 2 April 2009 pp. 299-324
- Turner, James Morton, "The Specter of Environmentalism": Wilderness, Environmental Politics, and the Evolution of the New Right. *The Journal of American History* vol. 96. no. 1 2009 pp. 123-47